【363】

氏　名（本籍）	牧野一穂（長野県）（まきのかずほ）
学位の種類	博　士（芸術学）
学位記番号	博甲第 6639 号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**日本画における合板を支持体に用いた表現の研究**

主　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	岡崎昭夫
副　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	守屋正彦
副　査	筑波大学教授		藤田志朗
副　査	高知大学講師	博士（芸術学）	野角孝一

論文の内容の要旨

（目的）

本研究は、日本画材として馴染みの薄かった合板という素材を、日本画制作に使用するために制作者的視点と科学的視点の２つの視点から追究し論じている。著者が焦点をあてた合板は、一般的に板の代替え品や建築資材などとして使用される素材である。これまで合板については、研究開発と製造方法に関しての多数の先行研究があるものの、日本画における支持体としての研究は、少数の作家による記述が散見されるに留まりおよそ等閑に付されてきた。このため現状では、和紙が使用される支持体の大多数の割合を占有している。しかし合板を支持体として選択する作家は、少数派に属するという評価がありながらも未だ合板という素材が、製作が開始されてから今日に至るまでに如何なる性質を得たのか認識が行われていないことから日本画制作に用いる支持体としての決定的な評価が下されないでいる。本研究は、合板を日本画制作に用いるための術を見出し、効果的な表現を実践の中で模索し、日本画材としての評価を定着させ、その有用性を証明することを目的としている。

（対象と方法）

本論文における研究対象は合板であり、本研究は合板という素材に対し、文献・実地調査、制作に使用することを念頭に置いた実験検証、そして判明した事象を著者の制作へ還元する実践検証の３つの方法から追究している。はじめに行われた文献・実地調査から、合板を使用する上での手掛かりを探り、そこで得られた見解を研究の足掛かりとし、その後の実験検証、実践検証を試みている。具体的には各章において、以下のような検証を行っている。

第１章では、日本絵画における支持体と表現の関係を探り、本論の目指すべき表現を検討した。また、本章では日本絵画と合板の関わりついても調査を行っている。第２章では、前章で明らかになった合板を用い日本画を描いていたパンリアル美術協会について、その作品の取材、表現の変遷、使用した動機、合板の使用方法など、著者の表現へと還元することを念頭に置いた調査を行っている。第３章では、作品取材で判明した合板独特の現象・効果を、様々な実験から制作に使用できる術を見出すことを行っている。そして第４章において、これまでに明らかになった現象・効果を、実践を通し有効的な使用方法を模索している。

(結果)

これまで日本画における合板の技法、使用方法については、パンリアル美術協会によるホルマリン技法についての先行研究があった。また合板の耐久性については茫然としていたため、実見調査を行った。結果、作品には目立った劣化が確認されず、約60年近い経年劣化を保証出来得るものと考えられた。さらに制作を念頭に置いた実験から、使用した際の効果的な現象を明らかにし、実践において合板を有効的に応用する手段を勘案し、一つの方法論を導き出している。本論が導き出した表現は、絵具の塗り重ねのみで表現されてきた従来の日本画表現とは異なるものである。それは支持体を削る、焦がすといった合板へ加工を行う点において従来の表現と大きく異なり、現代日本画表現に新たな側面を見出したと言えるだろう。合板は日本画材としての使用が十分に考えられるものであり、また表現においても有用性の高い素材であると結論付けられる。

(考察)

本研究が提案する、従来の麻紙で行ってきた描法に、合板の持つ性質と独特の現象・効果を取り入れた表現は、絵具の質感のみで表現されてきた現代日本画表現において、新たな側面を見出したと言える。本論文は、麻紙が一般的な支持体として使用される現代日本画表現において、支持体から見直すことの必要性を示唆しており、これまで積極的に取り入れられてこなかった素材を著者が研究したことには、表現の幅を広げる上でも大きな意味を持つものと考えられる。

審査の結果の要旨

日本画分野において馴染みが薄かった素材に対し、日本画材としての役割を見出そうとする本研究の取り組みは、現代日本画表現の幅を広げる上で、非常に意義のある研究であると考えられる。とりわけ、合板の特性を見出し、効果的な使用方法やその実例を記録として残したことは、後進に対し合板を使用する上での手引きとなるべく資料としての役割を期待できるものである。また本論文では、古典から学ぶことを通して日本画における支持体の在り方を再確認し、そこから現代日本画表現の可能性を検討している。古典表現を踏襲しつつも、現代日本画表現として新たに展開したことは、評価に値するものと考えられる。現代では薄れてしまった支持体選びの重要性、支持体の選択及び下処理からが表現であると指摘する本論文は、現代日本画表現の幅を広げるきっかけとなる研究としても期待されることから、優れた研究として高く評価したい。

平成25年1月8日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。